

人生の三分の二は強くなりたいと思って生きてきた。高校時代、サッカー部のゴールキーパーとして全国大会出場を目指していた僕は、セービングは得意だったがハイボールが大の苦手、ゴール前に高いボールが上がっただけで、もう怖くて怖くてどうしようもなかった。いちばん大切な冬の全国選手権大会予選。自分のミスで失点して、負けて、もう団体競技はこりごりだ、と思った。学校の帰り道、近所のへらへらした不良高校生にからまれて、怖くてビクビクしていたこともあった。強くなりたいと思った。

京大に入って、手当たり次第に強くなれそうな運動部を探した。ボクシング、少林寺拳法、柔道、空手などなど。京大入試直前に、アントニオ猪木とウィリーの異種格闘技戦をテレビで観て、空手が最強だ、と思った。それに、他の運動部はそれほど強そうには見えなかった。空手道部に入門することにした。優しく勧誘してくれた先輩が、最初の稽古からはガラッと怖くなって、こりゃマズったかな、と思った。入部早々、ゴールデンウィークに京都で開催された全関西個人戦で、井上先輩が準優勝。とんでもない部に入部してしまった。と思ってたら、6月に先輩たちは、なんと西日本大会で、優勝！もちろん、国公立大学では初めての偉業だ。鬼のような形相の青木先輩の姿が、「月刊空手道」の表紙を飾った。僕たちは、京大空手道部最強の年の、記念すべき一回生だ。

最初の合宿で、一回生が学んだ技を見せて、先輩方の前で理論的に説明することを求められた。僕が一生懸命「送り足蹴り」を説明すると、先輩方に大爆笑された。サッカーのゴールキーパーがボールを蹴る時は、こういう動きをするだけだな。空手が下手くそな自分が恥ずかしくて、情けなかった。二回生の終わりの審査で、同期はほとんど黒帯を取れたのに、僕はまだ茶帯だった。もっと空手が上手くなって、強くなりたいと思った。

ひとつ上の先輩方は、中井先輩が全関西個人戦準優勝、全関西団体戦準優勝、全日本団体戦ベスト8。僕たちは、先輩方には全く歯が立たない。それでも、強くなりたくて、歯を食いしばって、同期の馬屋原、志村、北島、福本と励ましあいながら、頑張った。四回生になって、ぎりぎりです試合に出して貰えるようになった。全関西個人戦、西日本大会、七帝戦。そして秋の全関西団体戦。準決勝の相手は関西大学。副将の僕は、送り逆突きでやっと追いついて、2ポイントで並んだ。そのまま引き分けていけば、京大の決勝進出は間違いない。しかし、どうしても勝ちたかった僕は、終了間際に無理やり蹴りを出し、受けから中段突きを決められた！30年以上経った今でも、その瞬間は鮮明に覚えている。一生、忘れられないと思う。僕をメンバーから外した京大は、三位決定戦で大商大を下し、見事に全関西三位。祝賀会の席で、僕は顔で笑い、心で泣いていた。僕の京大空手道部での戦績は、情けない結果に終わった。もっと強くなりたいと思った。

卒業して東大の大学院に進んだ。予備校講師のアルバイトを紹介してくれたのは、当時の東大空手道部の監督。本郷の七徳堂や駒場の道場で、東大の稽古に参加させてもらった。研究所が駒場から相模原に移転し、研究漬けの生活をしていると、また道場に通いたくなってきた。町田にある極真会館城西支部に入門することにした。フルコンタクトでも、思ったより基本や型を重視していたのが、意外だった。後で知ったのだが、全国大会上位入賞者を何人も輩出している、伝説の支部だった。全国大会に向けて激しい稽古をしている巨軀の二段と向き合う。顔面突きがない極真会館は、間合いが極端に近い。飛び込んで前拳一発で仕留めたいところだが、それより間合いを詰められると、どうしようもない。上段をカバーすると中段前蹴りが来る。前蹴りを受けようとしたら、軌道を変えた上段回し蹴りを極められて、ノックアウトされた。もっと強くなりたいと思った。

ポストドクではアメリカに行くことになった。NASAでの研究は楽しかったが、しばらく格闘技をしていないと、また身体がウズウズして来る。でも、Kims's KarateとかAppollo Karateとか、フランチャイズチェーンみたいな道場は、レベルが低すぎて、お話にならない。空手はあきらめて、ワシントンDCにある、和風建築の立派な御殿、五月女貢師範の合気道道場に見学に行った。技のレベルの高さと、たくさんのアメリカ人が畳敷きの大道場で、静かに、真摯に稽古している姿に、身が引き締まる思いがした。しかし僕は、殴ったり蹴ったりするほうが好きだ。貧困地区のコミュニティセンターにある、ボクシングとキックのジムに入門することにした。プロになって一旗揚げようとしている黒人やヒスパニックの若者たちの、レベルが高いこと、高いこと。軽いジャブで、重いサンドバッグがズズシ

と揺れる。一番強いけど、ふて腐れた態度の黒人の若者を、白人コーチが叱ったり、諭したり、なだめたりしながら、熱く指導している。マイクタイソンも、若い頃はこんな感じだったんだろうな。僕はヘッドギアをつけて、でっかい白人の若者とスパーリングだ。でも、グローブをつけて顔面を殴りあうのには、慣れていない。キックで倒してやりたいところだが、相手がでかすぎてハイには届かない。ミドルを出したところに顔面パンチを合わされたら、意識が跳んで、もうフラフラだ。セコンドで熱血コーチが優しく声をかけてくれると、涙が出るほどありがたい。次の日、頭の芯がズキズキと痛んだ。こりゃ、やばい、いちおう僕は頭脳労働者なんだけどな。もっと強くなりたと思った。

携わっていた人工衛星の打ち上げが失敗、NASAではやる仕事が無くなってしまって、ヨーロッパに派遣された。しばらく家族でジュネーブで暮らすことになった。スイスの公立小学校は、超ゆとり教育の週休三日制。水曜日の午前中は、ほとんどの子供が、小学校の地下にある(!)立派な武道場で、柔道やら空手やら合気道やらを習う。うちの二人の息子たちも、地元のスイス人に交じって柔道を始めることにした。ジュネーブ地区の小学生の柔道大会は、何百人も集まって、大盛況だ(靴下を履いたまま乱取りするのだけはやめてほしいけど)。出会うスイス人やフランス人が皆んな、武道はスバラシイ、スバラシイ、と口にする。弓道を強く勧めてくれるスイス人もいた。ユーロスポーツチャンネルで、ドイツ語やフランス語の解説付きで大相撲中継を観ていると、シュールな気持ちになってくる。これだけ多様な武道や格闘技を生み出した、世界の東の端にある日本っていう島国は、いったいどういうところなんだ？

アメリカに戻って、子供達と一緒に柔道を始めることにした。60台後半の小柄な先生は日系アメリカ人。太平洋戦争の時は、強制収容されていたという。日本に一度も行ったことはないけれど、柔道と講道館と日本への憧れは、人一倍強い。僕が先生に触れると、一瞬で投げ飛ばされ、極められ、絞められ、コロサレル、と思った。寝技の凄さ、関節技と絞め技の恐ろしさを、初めて知った。年柄年中、畳に這いつくばってた京大柔道部の連中を、僕らは鼻で笑ってたけど、本当は彼らは強かったんだな。柔術の怖さも、高専柔道なんていう言葉も、ずっと後になってから知った。昇級審査では、背が高い白人の若者と当たった。相手は執拗に内股を狙ってくる、じゃあ、こっちは、でかい相手には両襟を掴んで引き釣りこんで、巴投げだ！しかし、そんな大技は、簡単には決まらない。それじゃあ、内股すかしで逆に返してやる！と思ったところで、先に内股を取られて、一本負け。もっと強くなりたと思った。

13年ぶりに日本に戻り、大学院時代を過ごした相模原の研究所に就職した。しばらく何もしていないと、また体がウズウズしてくる。人を殴ったり蹴ったり、投げたり絞めたりしたくなってくる。職場の近くに、たまたま、K1甲子園で優勝したHIROYAのキックボクシングジムを見つけた。仕事に疲れて研究所からの帰り道、ジムに寄って、サンドバッグを思いっきり、蹴ったり殴ったりしていると、心も体もスッキリだ。これだよこれ、オレは、こういうのがやりたかったんだよ！ひときわ目立つ、童顔で小柄の中学生がいた。目がとまらないほど、動きが速くて軽くて、ローキックが馬鹿みたいに重たい。スパーリングの相手をさせてもらおうと、僕のパンチは全く当たらない。左右に動かれ、交互にローキックを浴びせられ、動きを止められたところにボディブローを貰ったら、身体を折って呻くことになった。すごい子供がいるな、と思ったら、それがHIROYAさんの弟、後にK1チャンピオンになった大雅だった。

歯医者で型を取って貰い、1万円も出して専用のマウスピースを作った。バンテージも上手に巻けるようになった。素手で人や巻き藁を殴るような野蛮なことは、もうできなくなってしまった(そんなことをしたら、拳が壊れてしまう!)。グローブをつけ、ヘッドギアをかぶって、マウスピースをはめると、がぜん、戦闘意欲が湧いてくる。今日のマススパーリングのパートナーは、アマチュアでいちばん長く続けてる、ジムの主のような若者。じゃあ、今日は、お互い軽い感じで。ジャブで互いの距離を測りつつ、ローキックを出し合い、脛でカットして、基本通り逆のローかミドルで返す。ワンツーから、足をスイッチして、左ミドル。ときどき、右のハイ。相手が左ジャブを出してきたところ、僕は右足を引いて、時計回りにクルリと回ってバックスピン、それが相手のノーガードの右脇腹に見事に決まった！パートナーは、リングに倒れて、のたうち回っている。すいません、すいません、と僕は必死に謝りながら、心の中では、やったぜ！と叫んでいる。

同期の北島君の紹介で、東京水産大や北大OBの猛者たちが集まる柔道会に参加させてもらうことにした。高専柔道仕込みの寝技や、危ない絞め技や関節技も習った。春と秋に恒例の合宿では、さすが

水産大、豪勢な海産物と日本酒をたっぷり堪能させてもらうが、稽古は一日中、みっちり。乱取りになったら、もう60をとうに超えたオヤジが相手だ。お年寄りの先輩には申し訳ありませんが、ちょっと投げさせて貰います。と、思ったところがどっこい、オヤジ猛者は岩のようにビクともせず、逆に背中から畳に思い切り叩きつけられ、息ができなくなる。どうしようもなく、悔しい。もっと柔道も稽古しないと。品川の海洋大道場までは遠いから、職場の近くの中学校で、地元の消防士さんが指導している柔道クラブに参加させて貰うことにした。小さな中学生たちを次々と投げ飛ばして、ああ爽快、と思ってたら、彼らは日に日に成長し、大きく、強くなっていく。その一方、こちらは日に日に老化し、筋力は衰え、あつというまに逆転される。オヤジにも中学生にも、柔道では簡単に勝てない。もっと強くなりたい。

相模原市民柔道大会、無段の部。相手はスポーツマンタイプの20代前半の若者。相手の応援団が、こんなオヤジに負けるなよ、みたいな声援を送ってくる。ざけんじゃねえよ、ぶっ殺してやろうか？前後左右に揺さぶりつつ、堅実な決め技、大外、内股、大内を次々と仕掛ける。消防士の先生に教わった、山下泰裕の得意技だったというケンケン内股も試す。しかし、相手はなかなか倒れない。やるじゃねえか、スポーツマン。そうこうしているうちに、もつれ合って一緒に倒れ、なぜか有効を取られた。よし、このまま寝技だ！白帯相手にはかわいそうだが、高専柔道仕込みの腕ひしぎ十字固めで、へし折ってやる！両手で相手の親指を上にして手首を取って、両足で肩を押さえつけると同時に、腹で押し上げて肘を折る、のだったかな？あたふたしているうちに肘を極めきれずに、優勢負け。関節技は理論的で面白いが、実践するのはすごく難しい。関節技も、もっと練習して、もっとうまくならないと。

人生の三分の二は強くなりたいと思って生きてきた。いつかは強くなりたいと思って、京大体育館の地下道場で必死で雑巾がけをしていたのは、今の僕の人生のやっとな分の一が過ぎた頃だ。あの頃の、いつも何かを怖がってオドオドしていた君に向かって、今の僕は、自信を持って、少しは強くなったと言えるだろうか？でも、「強くなる」って、いったい、どういうことなんだろう？徒手空拳で相手に致命的なダメージを与えて、簡単に人を殺せるようになることが、強くなるっていう事だろうか？

いろいろな格闘技をやってきて、定まったルールの中で技を磨けば磨くほど、反則技に対しては無防備になる、という、あたりまえの事実を目の当たりにした。だから、柔道家を倒すにはローキック、極真空手には顔面パンチ、キックボクシングにはテイクダウンから寝技が、最も有効的だ。総合格闘家も、あらゆる格闘技で禁止されている必殺技、指を折ること、目を突くこと、噛みつくことに対しては無力だろう。もし、相手に効果的に肉体的ダメージを与えたいければ、ルールなんか無視して、それこそ最も卑劣なことをやってやればいい。しかし、それはさすがに、「強い」という事とは違うだろう。

ギリシア・ローマ時代の奴隷たちがパンクラチオンで殺し合う中で、徐々にルールが整備され、それがレスリングやボクシングというフェアなスポーツにまで発展してきた。中国や沖縄や日本で実践されていた、プリミティブな戦のための武技や武術が、達人の手で洗練され、偉人によって体系化され、武道が誕生した。命をかけた真剣な戦いの中にこそ人間の本質があり、戦いの神髄は残したままに、技を体系化し、安全性を考慮したルールを整備することができる。そのような枠組みがあって初めて、練習や修行のメソッドが確立され、初心者でも少しずつ技術を習得し、勝つためのスキルを身につけ、「強くなる」ことができる。つまり、格闘技や武道で強くなるためには、どうしても何らかの枠組みが必要で、格闘技で強いとか弱いって言えるのは、特定のルールや体系の中に限ってのことなのだ。

強くなるためには、先人が長年掛けて積み上げてきた体系を尊重し、型や技術を真面目に学び続けなくてはならない。己を厳しく律し、精進を続けなくてはいけない。生死を賭けた真剣勝負を模した試合においては、ルールを守り、自分と同じく厳しい修練を経てきた相手に、誠実に、礼を持って、正々堂々と対しなくてははいけない。厳密なルールがあるからこそ、勝負は公平で、有無を言わず、強い者と弱い者が決する。決した勝負の結果に、疑義を唱えてはいけない。敗者は、自分以上の精進を積んできた勝者を称える。勝者は、いずれは必ず敗者になるから、決して奢らず、より強いものに対して謙虚である。

そのように考えると、格闘技や武道の中には、人類や社会にとって、もっとも大切なことが凝縮されている、とも言える。さらに、合気道や居合道のような武道では、強くなるために、格闘することもない。卓球だって将棋だって格闘はしないが、スポーツでもゲームでもビジネスでも、何においても、強くなることは重要だ。人間社会のすべてにおいて、強くなるための「道」があり、武道はそれをもっともわかりやすい形で示してくれる。だからこそ、武道には時代や国を越えた普遍性があり、世界中の人々に愛され、実践され続けているのだろう。「強くなる」道は、先人の知恵や技術を尊重し、真摯に学び続けること。己を律し、努力し、ひたむきに精進を続けること。ルールを守り、公平であること。礼を知り、潔く、謙虚であること。人間は、強くならなくてはいけない。

京大空手道部に入部して、体育館の地下で、ビクビクしながら空手の稽古を始めたばかりの君に、伝えたいことがある。僕は、あの頃より、ちょっとだけ、強くなったよ。だから、君も、きっと、今より強くなれるよ。僕は、死ぬまでに、どれだけ強くなれるだろうか？